キリスト教思想研究入門 6/8/2009

S.Ashina

＜前回＞宗教批判・フォイエルバッハ・マルクス

１．近代理性と宗教：近代理性の母体としての宗教（光のメタファー）　→　理性と宗教の区別と内的緊張　　→　理性による宗教の合理化・合理的宗教の試み　→　分離・分裂　→　理性による宗教批判　→　対立　→　相互無関心、関係性の消滅

２．フォイエルバッハの宗教批判の二つの前提とその帰結

①人間の類的本質の無限性

②類的本質の外化（＝疎外、投影）

・「宗教は無限者の意識である。したがって宗教は人間が自らの無限の本質についてもつ意識であり、かつそれ以外の何ものでも在り得ない」、「神の意識は人間の自己意識であり、神認識は人間の自己認識である」、「神は人間の鏡である」、「神学の秘密は人間学である」

・フォイエルバッハの宗教批判は、反キリスト教的とキリスト教的の双方における宗教批判の原型であり、フォイエルバッハ問題は、現代神学の課題であり続けている。

３．マルクス

①人間社会に宗教が生じたのは単なる偶然ではない。宗教は欲求の疎外形態における実現（否定的な媒体）であり、人間の現実生活の一契機なのである。

②宗教批判と政治社会批判とは密接に関連

③宗教は人間社会の歴史において必然的に生じたものであるが、その歴史的条件が変化するとき、必然的に終焉を迎えるはずである。

④宗教を不可欠の契機として含まないような現実世界の構築

共産主義社会：非疎外形態における欲求・類的本質の実現→これ自体がユートピアか？　自己止揚・自己否定の契機をマルクス主義は内部に組み込んでいるか？

４．宗教史は宗教自体による宗教克服のプロセスである（ティリッヒ）。

＜ヨハネ黙示論２１章＞

22　わたしは、都の中に神殿を見なかった。全能者である神、主と小羊とが神殿だからである。23　この都には、それを照らす太陽も月も、必要ではない。神の栄光が都を照らしており、小羊が都の明かりだからである。

8. 津田雅夫　『マルクスの宗教批判』柏書房。

9. ティリッヒのマルクス論　『ティリッヒ著作集　第１、１０巻』白水社。

６．　キルケゴールと 20 世紀神学

１．キルケゴールの思想的特徴

①宗教批判者としてのキルケゴール（1813 ～ 1855）

真のキリスト教と近代市民社会において堕落したキリスト教

→バルト（啓示と宗教との区別）

②反ヘーゲル主義→実存主義の先駆者

真理：客観性としての真理／主体性としての真理

体系：論理学の体系は可能である（諸イデアの相互関係）／しかし、歴史的な現実存

在（実存）に関わる事柄についての体系は、人間には不可能である
同時代性と同時性：信仰はキリストと信仰者とが同時性に立つことによって可能になる。主体的真理として、無限の情熱の対象として、決断的に関わること。
③仮名と実名の二種類の著作　→思想の表現形式、レトリックに注目
仮名の意味：1. 小説あるいはフィクション性→著作自体に注意を集中（詩的機能）
2. 一人の思想家の思想が、複数の仮名へと分散する。思想の断片性
「私自身は、ヨハンネス・クリマクスよりは高いところにいるが、アンティ・クリマクスよりは低い地点にいる」、『死に至る病』副題：教化と覚醒を目的とする（＝建徳的）

２．キルケゴールの宗教批判（現代批判と市民社会のキリスト教）

１．「コルサール事件」（1846 年）、週刊新聞『コルサール』（ゴシップ暴露）
２．キルケゴールの現代批判（『文学評論』の第２章）
・革命の時代と分別の時代（反省の時代、情熱のない時代）
水平化と外面性　→　新聞などのマスコミと世論・公衆といったもの
・宗教的信仰：個々人の救いの問題、個人ひとりひとりの事柄
宗教者にとってきびしい試練、修養　→　「良き戦い」として人生（天路歴程）
・沈黙、無関心を装った教会　→　非人間的大衆化社会を批判し真のキリスト教を守るべき使命をもつ教会（戦う教会）という任務の放棄

３．単独者の思想

「キリスト教的な英雄的精神とは、人間がまったく彼自身であろうとあえてすること、ひとりの個体的な人間、この特定の個体的な人間であろうとあえてすることである、
――　かかる巨大な努力をひとりでなし、またかかる巨大な責任を一人で担いながら、神の前　にただひとりで立つことである」　→　単独者　→　ルターの信仰
①人間論の伝統：人間を統合と捉える議論。デカルトにおける、心（思惟）と身体（延長）という二つの実体の合成としての人間。両極性における人間存在の分析。
②人間の自己：自己関係という構造を組み入れた関係的存在
自己反省、自己参照性、自己関係：「……「「「自己」に関係する関係」に関係する関係」……」　→　無限に多重化する存在者である（生成過程における自己）
③自己＝生成しつつ在る存在者、自己になりつつある存在者　→　本来的な自己になるという課題
④関係存在としての自己の存在根拠
１．人間は自己自身の中にその存在根拠を有する　→　自己組織化
始まりの問題（宇宙の始まりのその前）と無限遡及のパラドックス
２．関係存在の措定者を自己ではない他者として考える立場
⑤人間＝自己関係的存在→自己になる課題→不安と絶望の可能性

４．実存弁証法と真のキリスト者への道

「美的段階　→　倫理的段階　→　宗教性Ａ　→　宗教性Ｂ」：精神の発展プロセス
［美的段階］：美的なものが人生の原理あるいは目的になっている生き方
［倫理的段階］：倫理的なものが原理または目的とする生き方
３．「誘惑に陥らぬよう、目を覚まして祈っていなさい。心は燃えても、肉体は弱い」（マ

タイ 26:41)。

［宗教性Ａ］:「わたしは特定の宗教は信じないが、神や霊の存在は信じる」

４．宗教性ＡとＢとの関係（宗教性一般の立場からキリスト教へ）

５．［宗教性Ｂ］: 同時性、あるいは絶対的逆説性

６．市民社会において堕落したキリスト教（精神性から脱落）と異教（無精神性）

５．キルケゴールの問題性

７．キルケゴールとマルクス、ニーチェ

８．個人と社会・共同体との関係、個人の主体性の強調→単なる抽象論、
大衆の蔑視→エリート主義あるいは単なる変わり者

６．20 世紀神学とキルケゴール

９．20 世紀神学は、キルケゴールの強力な影響下にある。
とりわけ、弁証法神学とその周辺の神学者たち
そして、日本のキリスト教思想・宗教哲学
さらに、ポスト・モダン神学
マーク・テイラー『さまよう――ポストモダンの非／神学』岩波書店。

＜参考文献＞

１．キルケゴール『現代の批判』『不安の概念』『死に至る病』（岩波文庫）
『哲学的断片』『哲学的断片へのむすびとしての非学問的あとがき』(『キルケゴール著作集』白水社)

２．武藤一雄　『キェルケゴール』創文社。

３．小川圭治　『キルケゴール』講談社。

４．ティリッヒ『キリスト教思想史Ⅱ』（著作集・別巻三）白水社。

５．レーヴィト『ヘーゲルからニーチェへ』岩波書店。

６．ディーム　『キェルケゴールの実存弁証法』創言社。

７．川村永子　『キェルケゴールの研究』近代文藝社。

８．マッキノン他『キェルケゴール ── 新しい解釈の試み ── 』昭和堂。

９．大家憲一、細谷昌志編『キェルケゴールを学ぶ人のために』世界思想社、1996 年。

10. 稲村秀一『キルケゴールの人間学』番紅花舎、2005年。

11. 松木真一編、日本キェルケゴール研究センター刊行
『キェルケゴールとキリスト教神学の展望』関西学院大学出版会、2006年。

12. 日本キェルケゴール研究センター
http://www.justmystage.com/home/kierkegaard/

13. キェルケゴール協会
http://www.kierkegaard.jp/